

## 【参照検査結果の解説】

患者は41歳女性、数日前より発熱と倦怠感を主訴に外来受診。

検査結果( )正常基準範囲

総蛋白6.4g/dL(6.5~8.5)、アルブミン3.0g/dL(3.9~4.9)、尿素窒素17mg/dL(8~20)

クレアチニン0.71mg/dL(0.4~0.7)、AST44U/L(13~33)ALT 34U/L(8~42)

LDH 231U/L(119~229)、ALP459U/L(115~359)、 $\gamma$  GTP 18U/L(6~48)

T-Bil 0.6mg/dL(0.2~1.3)、総コレステロール162mg/dL(150~219)

中性脂肪70mg/dL(30~149)、CRP8.1mg/dL(0.3以下)、補体価61U/mL(32~49)

WBC $13.8 \times 10^9/L$ ( $4.0 \sim 8.0$ )、RBC  $3.71 \times 10^{12}/L$ ( $3.80 \sim 4.80$ )、Hb 11.7g/dL( $12.0 \sim$

16.0)、Ht36.4%(38~47)、PLT  $481 \times 10^9/L$ (150~400)

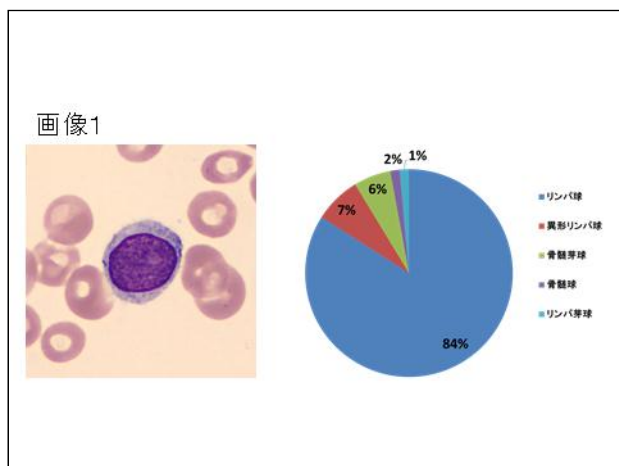
MCV98.1fL(84~93)、MCH 31.5pg(27~32)、MCHC 32.1%(32~36)

白血球分画(自動血球分画値)

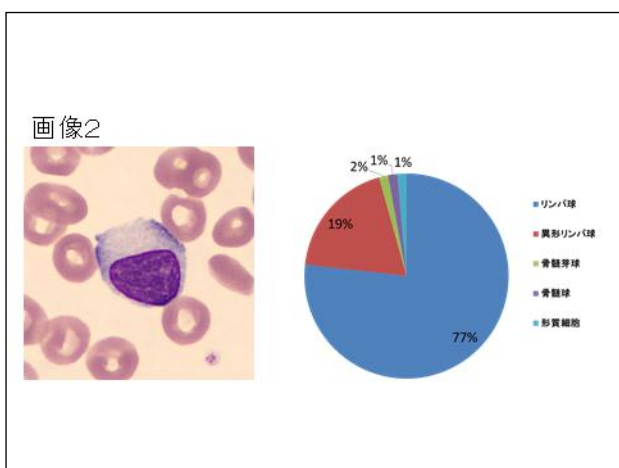
好中球87.0%、リンパ球7.9%、単球3.2%、好酸球1.6%、好塩基球0.3%

参照検査結果より正常基準範囲に対して低値は、総蛋白、RBC、Hb、Ht。高値はAST、LDH、ALP、CRP、補体価、WBC、PLT、MCVがある。特に注目すべき点は、発熱と倦怠感さらにWBC、CRP、補体価が異常値である点より炎症性反応を示唆する所見と考える。

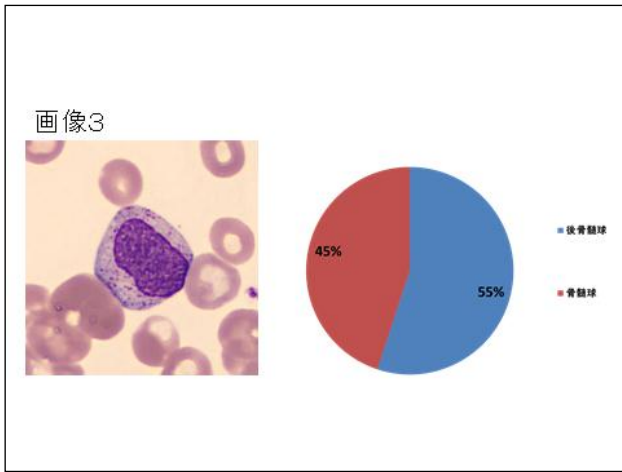
## 【サーベイ検査結果および解説】



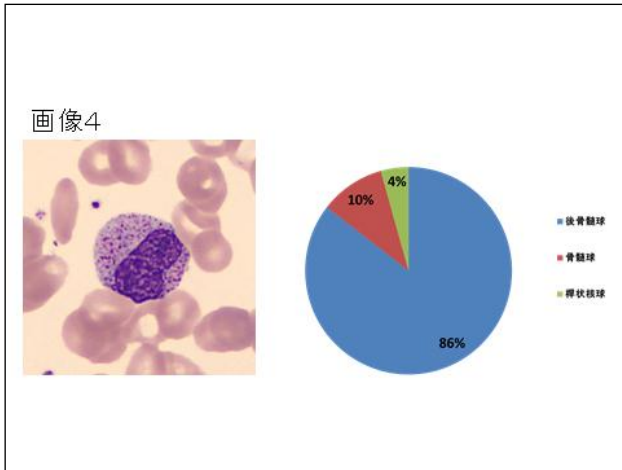
画像1：リンパ球 84%、異形リンパ球 7%、骨髄芽球 6%、骨髄球 2%、リンパ芽球が 1% の分類結果となった。細胞サイズも赤血球と比較しても大型とは言えず、類円形の核を持ち、淡青色の細胞質のためリンパ球に相当する所見と考える。異形リンパ球については施設毎の基準もあり標準化が最も難しい細胞であるが、各種基準案を参考にするもの標準化の第一歩と考える。



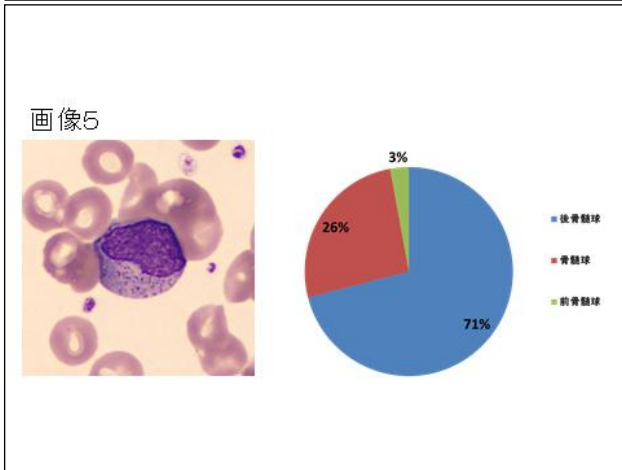
画像2：リンパ球 77%、異形リンパ球 19%、骨髄芽球 2%、骨髄球 1%、形質細胞が 1% の分類結果となった。核の偏在傾向を認めるが形質細胞と比較すると、淡紫褐色で類円形の核を持ち、淡青色の細胞質のためリンパ球である。明らかに細胞質の色調が異なるためリンパ球に相当する所見と考える。



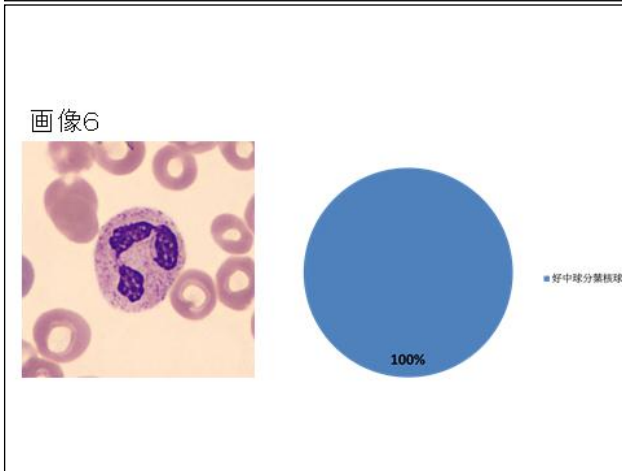
画像3：後骨髄球 55%、骨髄球 45%の分類結果となった。後骨髄球の分類基準案では核の形態において陥凹を認める（ただし長径と短径の比は3:1未満）ものとしている。画像3細胞は長径と短径の比が3:2であり、核の形態において陥凹を認めることより、後骨髄球近い所見と考える。



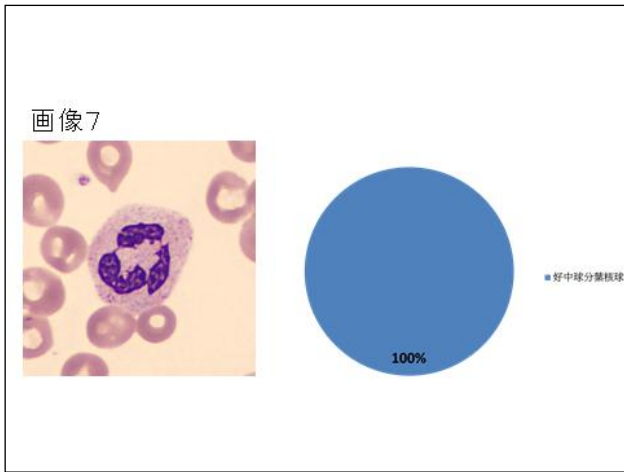
画像4：後骨髄球 86%、骨髄球 10%、桿状核球 4%の分類結果となった。画像4細胞は核の形態において陥凹を認めることより、後骨髄球に相当する所見と考える。



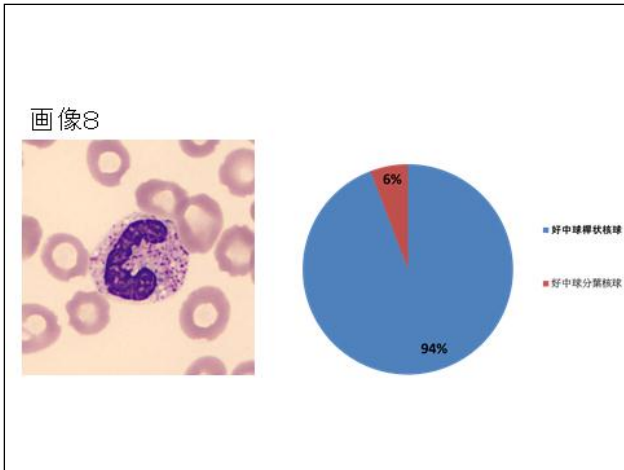
画像5：後骨髄球 71%、骨髄球 26%、前骨髄球 3%の分類結果となった。画像5細胞は長径と短径の比が3:2.5であり、核の形態において陥凹を認めることより、後骨髄球に相当する所見と考える。



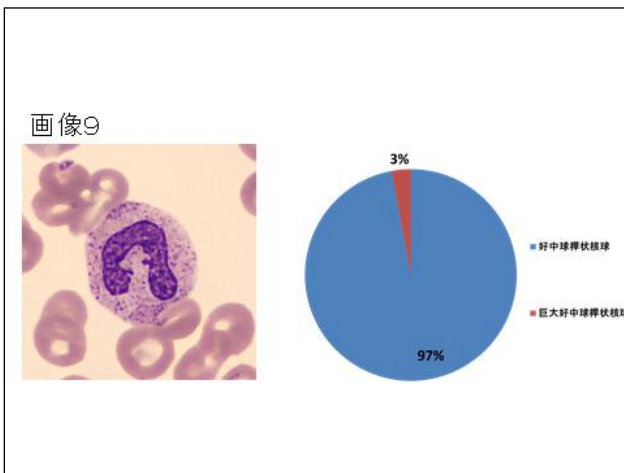
画像6：分葉核好中球 100%の結果となり、核は明らかにくびれており、核糸が認められる。また、核のクロマチンは粗大であり、細胞質にも好中性顆粒が認められる。分葉核好中球に相当する所見と考える。



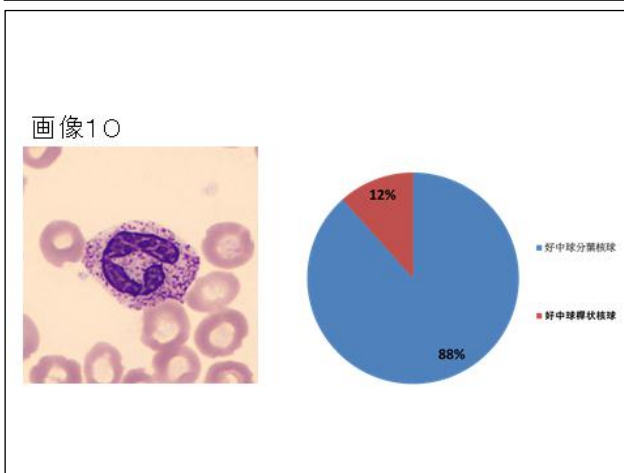
画像7：分葉核好中球 100%の結果となった。核は明らかにくびれており、明らかな核糸が認められる。また、核のクロマチンは粗大であり、細胞質にも好中性顆粒が認められる。分葉核好中球に相当する所見と考える。



画像8：桿状核好中球 94%、分葉核好中球 6%の結果となった。好中球分類基準案については2種類存在している。画像8の長径と短径の比率が3:1.8なので日本臨床検査技師会案および検査血液学会基準案についても桿状核好中球に相当する所見と考える。

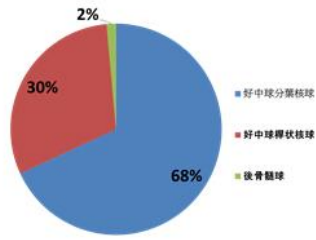
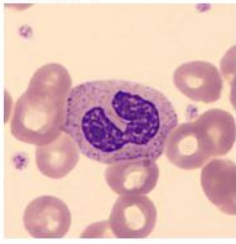


画像9：桿状核好中球 97%、分葉核好中球 3%の結果となった。画像8と同様に桿状核好中球に相当する所見と考える。



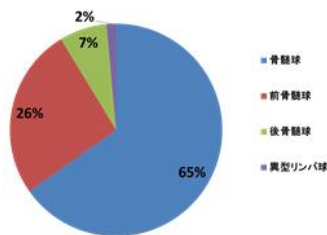
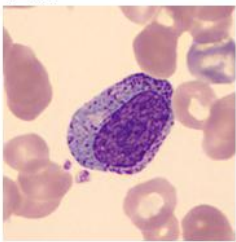
画像10：分葉核好中球 88%、桿状核好中球 12%の結果となった。長径と短径の比率が3:0.9ことより、日本臨床検査技師会案では分葉核好中球に相当する所見である。しかし、最小幅部分を核糸とは判断できないため、検査血液学会基準案では桿状核好中球に相当する所見と考える。

画像11



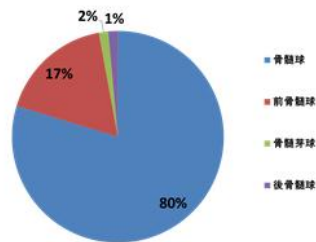
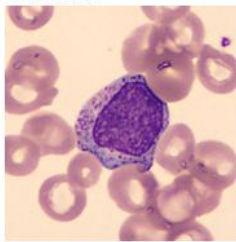
画像11：分葉核好中球 68%、桿状核好中球 30%、後骨髄球 2%の結果となった。最大幅部分と最小幅部分の比率が 3 : 0.6 なので日本臨床検査技師会案の 3 : 1 以下を満たしていることにより、日本臨床検査技師会案では分葉核好中球となる。しかし、最小幅部分を核糸とは判断できないため、検査血液学会基準案では桿状核好中球に相当する所見と考える。

画像12



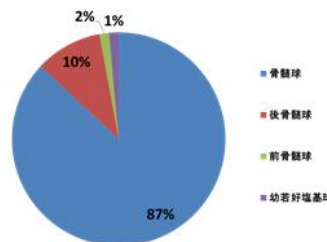
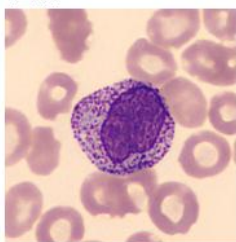
画像12：骨髄球 65%、前骨髄球 26%、後骨髄球 7%、異形リンパ球 2%の結果になった。豊富なアズール顆粒を認め、前骨髄球と鑑別が難しいが、細胞質は広く好塩基性で、粗大なアズール顆粒が認められるが核小体が認められず、クロマチン構造が粗大であるため前骨髄球よりは骨髄球に相当する所見と考える。

画像13

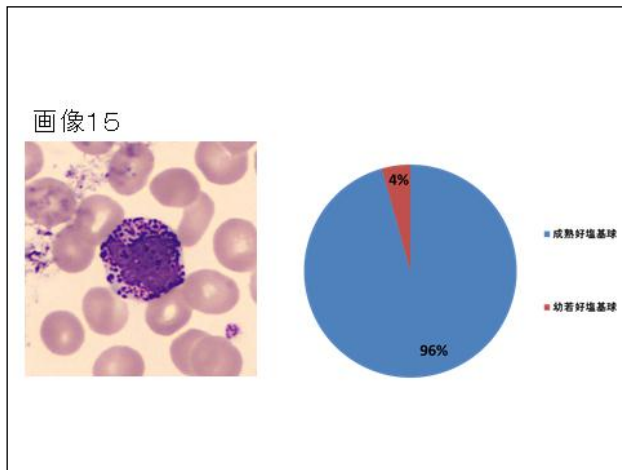


画像13：骨髄球 80%、前骨髄球 17%、骨髄芽球 2%、後骨髄球 1%の結果になった。画像12と同様に豊富なアズール顆粒を認め、前骨髄球と鑑別が難しいが、特異顆粒（二次顆粒）を認めるため、N/Cおよび細胞サイズから判断すると前骨髄球よりは骨髄球に相当する所見と考える。

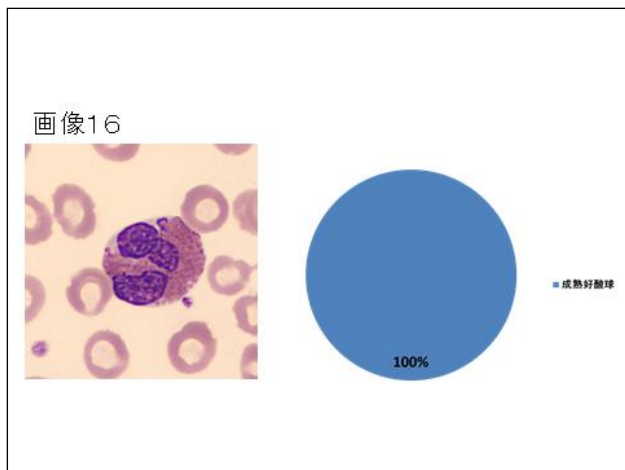
画像14



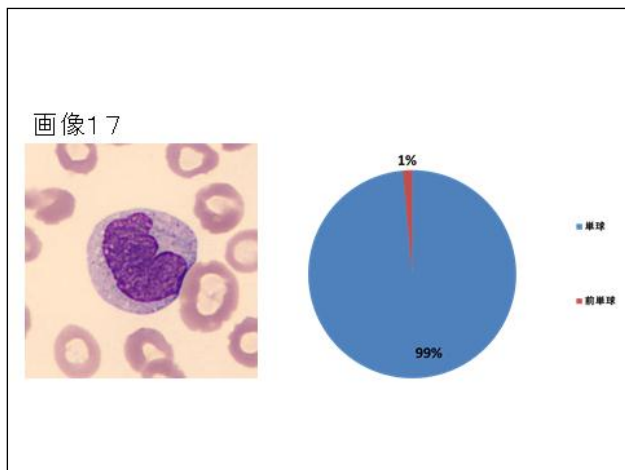
画像14：骨髄球 87%、後骨髄球 10%、前骨髄球 2%、幼弱好塩基球 1%の結果になった。細胞質には、微細なアズール顆粒と特異顆粒（二次顆粒）を認めるため、やや青味を帯びている。核には核小体が認められず、クロマチン構造も粗大であるため、骨髄球に相当する所見と考える。



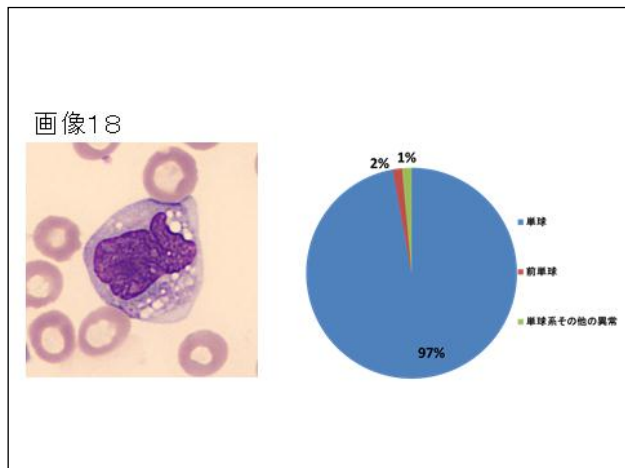
画像15：成熟好塩基球 96%、幼若好塩基球 4%の結果になった。核形は輪郭が不鮮明で、核クロマチン構造もはっきりせず、細胞質は淡褐色で大小不同の強い塩基好性顆粒を有している。成熟好塩基球に相当する所見と考える。



画像16：成熟好酸球 100%の結果になった。橙紅色で比較的均一な大型の好酸性顆粒を持ち、典型的な二分葉の核を持つ細胞は成熟好酸球に相当する所見と考える

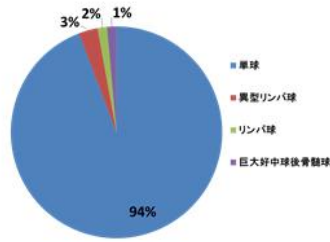
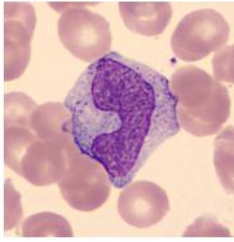


画像17：単球 99%、前単球 1%の結果になった。細胞質が大型の細胞で、核は不整形で陥凹があり、核クロマチンは微細網状で、細胞質は広く灰白色を呈し微細なアズール顆粒を有しているため単球に相当する所見と考える。



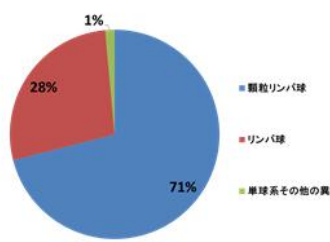
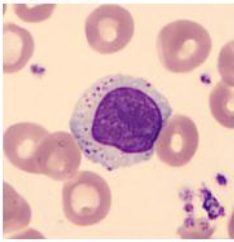
画像18：単球 97%、前単球 2%、単球系その他の異常 1%の結果になった。細胞質が大型の細胞で、核は不整形で陥凹があり、核クロマチンは微細網状で、細胞質は広く灰白色を呈し微細なアズール顆粒と空胞を有しているため単球に相当する所見と考える。空胞形成は単球によく見られる細胞形態であり異常所見ではない。

画像19



画像19：単球 94%、異型リンパ球 3%、リンパ球 2%、巨大好中球後骨髄球 1%の結果となった。大型の細胞で、核は不整形で陥凹があり、核クロマチンは微細網状で、細胞質は広く灰白色を呈し微細なアズール顆粒を有しているため画像 17, 18 様に単球に相当する所見と考える。

画像20



画像20：顆粒リンパ球 71%、リンパ球 25%、単球系その他の異常 1%の結果となった。淡紫褐色で類円形の核を持ち、淡青色の細胞質、さらに粗大なアズール顆粒を複数認める。3個以上の顆粒を認めるため顆粒リンパ球に相当する所見と考える。